

連載第23回 「奇跡の海」  
オホーツク海は流氷が来る  
気象キャスターネットワーク 世界最南端



皆さんは「流氷」を見たことはありますか？

1月末から2月にかけて、北海道のオホーツク海は、流氷に埋め尽くされ、「氷の陸」に姿を変えます。氷を砕きながら進む観光船に乗ると、壮大な光景に圧倒されます。この頃は、最高気温でも、氷点下5℃以下ですが、寒さも忘れるほど感動しますよ。(もしデッキで寒ければ、観光船内に入ると暖房完備ですので、すぐに暖も取れます)



紋別の流氷砕氷船



観光船で流氷帯を進んでいく

北極や南極ならまだしも、日本に流氷がやってきて、海が凍るって不思議ですよね。

オホーツク海は、世界的に珍しい流氷が来る南限で、「奇跡の海」とも呼ばれます。2つの条件が重なっているのです。

1つは「塩分濃度が低い」。

塩分を薄めているのは、シベリアを流れるアムール川。河口の流域面積は日本列島の5倍にも相当します。その巨大な川から大量に真水が流れ込み、オホーツク海の塩分濃度は3.25%まで下がります。この低濃度では-1.8℃ほどで凍ってしまうのです。

2つめは、「閉じた海」。

地形が関係します。カムチャッカ半島、千島列島、北海道に囲まれているため、周囲と海水が混じり合うことがないのです。ちなみに流氷をべろりと舐めても、しょっぱくありません。流氷は、海の真水の部分だけが凍ったものなのです。凍結するとき、塩分を海中に放出するので、流氷と接している海水は塩分が凝縮されています。

実は、この状態を塩づくりに活かさないかというアイデアもあるほどです。現在の製塩は海水の水分を蒸発させ、塩分を回収しますが、この方法よりも海水を凍らせて塩分を取り出したほうが、エネルギーが少なくすみ、効率的なのです。

将来的にも資源活用が期待されますが、すでに流氷は多くの恩恵をもたらしています。

オホーツク海が世界有数の好漁場であるのは魚介類のエサになるプランクトンが、流氷で運ばれ、さらに氷の下は太陽光を透過するため育ちが良くなるからです。現存する植物性プランクトン量は、



凍る海 流氷接岸

日本海に比べると、約1.8倍とか。特に、3月に流氷が去り、海明けすると毛ガニ漁が始まりますが、身がぎっしり詰まって甘くて絶品です。ホタテや牡蠣も美味しいですよ。そのほか、海のアイドル「クリオネ」の住み家でもあり、流氷に乗ってやってくる「ゴマフアザラシ」は愛くるしく、空には「オオワシ」が舞います。それぞれ、観光客の人気を集めています。



クリオネ (提供: 北海道立流氷科学センター)

ただ、このまま温暖化が進むと、流氷がやっとなくなるのが心配されています。

すでに、過去100年で40パーセントも流氷勢力

が弱まっていますが、海水温の上昇により、日本に到達するまでにとけてしまうのです。オホーツク海は、将来的に、日本で最も温暖化の影響を受けやすいと考えられ、21世紀末の平均気温は、全国平均で2.5~3.0℃の上昇が予測されますが、オホーツク海側は、約4℃です。流氷は「海のカナリア」の異名もあり、温暖化に対して、静かなメッセージも出しているのです。

すが い たか こ  
菅井 貴子 Profile

横浜市出身。  
明治大学理工学部数学科卒業後、気象予報士の資格を取得。  
九州から北海道まで各放送局の天気コーナーを担当し、「(移動距離は)日本一の気象予報士」を自負。  
現在は、北海道文化放送(UHB)「みんテレ」に出演中。  
気象予報士のほか防災士、健康気象アドバイザー、CFP(上級ファイナンシャルプランナー)として講演や執筆活動も行う。

